

- 1 早乙女の 一列ゆきて波の立つ
- 2 白壁を這う夏服の電気技師
- 3 蜥蜴の子だるまさんがころんだ
- 4 夏河の石かるがると子等の越ゆ
- 5 沈黙の一座見廻す扇風機
- 6 馬追の眼のやさし硝子窓
- 7 夕焼の中に小さき生家かな
- 8 赤蜻蛉空の一角占めにけり
- 9 爪の端に重み残して赤蜻蛉
- 10 亀虫の誘い出されし陽の溜まり
- 11 野地板の穴より覗く秋の空
- 12 願掛けの長き夫婦や木の実落つ
- 13 客人(まろうど)の背の照らされて柿紅葉
- 14 住まい継ぐ夫婦迎えて柿たわわ
- 15 こほろぎの翅震わせる土の上
- 16 見返りし鹿の眼の澄みにけり
- 17 ポケットの指に揉まれし葉屑かな
- 18 初雪のおとずれを聴く床の中
- 19 ほっほつと雪化粧して山ほのか
- 20 長老の注連緋う口の一文字
- 21 鮫鱈の眼にしゃぶりつく三十路かな
- 22 新妻や障子張りたる指の先
- 23 新妻の雨傘閉づる小正月
- 24 腹這いの山羊立ち上がる四日かな
- 25 並ぶ背の林のごとし釜始

- 26 刻を打つ如月の水ひと雫――
- 27 ホースより水ひとすぢに獵名残――
- 28 生まれくる世は選び得ず露の臺――
- 29 春雨をただ受くるなり石蛙――
- 30 若草や大地に分かつ雨の粒――
- 31 春昼の時計職人寡黙なる――
- 32 山菜萸の光こぼるる旧家かな――
- 33 新妻や弥勒の手なる春の暮――
- 34 鳶の来て鋏休めたる夏はじめ――
- 35 貯水池のいつしか満ちて蟬しぐれ――
- 36 傷つけし人想う夜の蛙かな――
- 37 蟻螂や覚悟のかたき面構え――
- 38 秋祭神主纏う牛の紋――
- 39 輪の中へ袖引き寄せる踊かな――
- 40 満月や米粒白き握り飯――
- 41 山栗の棘やはらかに雨の中――
- 42 ひと村にひと村ぶんの秋の山――
- 43 虫の音の傍らにある暮らしかな――
- 44 二拍手の遠く響きて冬に入る――
- 45 ストープを背に聞く謂れ古道具――
- 46 白銀の里に身を寄せ実万両――
- 47 口元の角度を保つ雪達磨――
- 48 暁天に雪搔く音の響きけり――
- 49 着ぶくれの幼子の眼の杵を追い――
- 50 ふるさとの小包ひらく冬日向――

- 51 〔ゆく年や形とどめる雲のあり〕
- 52 〔松過ぎの仏前の茶の香りかな〕
- 53 〔先頭のランナー北風をしたがへる〕
- 54 〔徐につかむポストの余寒かな〕
- 55 〔山際に夕日のありて鳥の恋〕
- 56 〔鶯や始祖伝来の節回し〕
- 57 〔電柱の傾きに慣れ春の風邪〕
- 58 〔手をつきてほのかにぬき我が田かな〕
- 59 〔田植機に王座の如く座りけり〕
- 60 〔人寄りてものを言いたる田植かな〕
- 61 〔山裾の水引き込みて蛙鳴く〕
- 62 〔おどろくも敷居に沿いて百足虫去る〕
- 63 〔父となる友を追いたる緑夜かな〕
- 64 〔秋の風妻帰るらし砂利の音〕
- 65 〔里唄のしゃがれ声なる地藏盆〕
- 66 〔泥みたる落穂を拾う一日かな〕
- 67 〔山の精気配鎮めて秋霽雨〕
- 68 〔穴熊の鼻先光る秋の夜〕
- 69 〔霜踏みて異国の人を想いけり〕
- 70 〔御仏の眉間に翳り河豚を食ふ〕
- 71 〔深々と光纏いて冬の苔〕
- 72 〔神棚の金具清める大晦日〕
- 73 〔ネクタイの結び目正す初仕事〕
- 74 〔酒壺の底の暗さや寒戻る〕
- 75 〔小春日の株（くいぜ）に坐する庭師かな〕

- 76 ささやきのこぼるるほどに梅の花――
- 77 春の野に燃ゆる故人の名刺かな――
- 78 あたたかや今日饒舌の郵便夫――
- 79 人里へ便りをはこぶ春の鳥――
- 80 枝々を移る野鳥や花椿――
- 81 春の日の訛り帯びたる法話かな――
- 82 百の火を焚きて闇夜の桃の花――
- 83 サブ打つ影しなやかに夏に入る――
- 84 干し藁の軒に忙しき初燕――
- 85 羽搏きの数ほど翔べず燕の子――
- 86 遠雷に猫の眼の光りけり――
- 87 即席の椅子並べたる夏野かな――
- 88 花火師の一札残し河を発つ――
- 89 映写機の照らす埃や秋に入る――
- 90 一両の列車駆けるや野分晴――
- 91 海境の道遥かなり天の川――
- 92 嚙りたる歯に色移す甘藷かな――
- 93 陶工の貌ほぐれたる夜半の秋――
- 94 改修の小屋の露に後の月――
- 95 居処を小さく残す冬支度――
- 96 両の手に遊ばせている蜜柑かな――
- 97 沈黙を沈黙のまま冬の星――
- 98 抽斗に残す走書や年惜しむ――
- 99 斎燈の炎の中の若き年――
- 100 巫女の掃く参道長し浦の春――